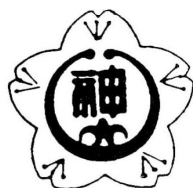


平成19・20年度

文部科学省「小学校における英語活動等国際理解教育推進事業」

# 実施報告書

(1年次中間報告)



土浦市立神立小学校

# 目次

I	はじめに	1
II	本校の英語活動・国際理解教育の歩み	2
	（１）平成１５年度まで	
	（２）平成１６年度	
	（３）平成１７年度	
	（４）平成１８年度	
	（５）平成１９年度	
III	実践・研究	4
	1 主題の設定	
	2 研究のねらいと取り組みの内容	4
	3 研究組織	5
	4 実践・研究の内容	
	（１）本校の英語活動における基本的な考え方	5
	（２）具体的な取り組み	
	①各研究部による取り組み	
	[授業研究部]	7
	(1)授業を展開するにあたっての基本的な スタンスの決定	7
	(2)指導計画・評価規準の作成	7
	[調査研究部]	8
	(1)実態調査の実施	8
	(2)児童の実態，結果と分析	8
	(3)教師の実態，結果と分析	9
	[環境構成研究部]	9
	(1)英語環境の整備について	9
	(2)E-world 活動について	9
	②各学年による取り組み	
	(ア) 授業実施のための準備・打ち合わせ	10
	(イ) 授業の実践例	10
	③英語活動研究部による取り組み	
	(1)指導力向上のための研修会の実施	12
	(2)講師を迎えての講演会の実施	13

# IV

<b>研究の成果と今後の課題</b>	・ ・ ・ ・ ・ 1 4
1 研究の成果	・ ・ ・ ・ ・ 1 4
2 今後の課題	・ ・ ・ ・ ・ 1 5

# V

<b>資 料 編</b>	
1 年間指導計画・評価規準と指導案	・ ・ ・ ・ ・ 1 6
2 アンケート調査問題と結果	・ ・ ・ ・ ・ 3 3

# I はじめに

本校は、平成19・20年度文部科学省「小学校における英語活動等国際理解教育推進事業」の拠点校として指定を受け、土浦市教育委員会の指導のもと、英語活動の実践・研究に取り組むことになりました。

平成18年度までは、学校評価や年度末の反省を生かし、毎年少しずつ改善しながら、年間3～4時間程度実施していた英語活動の時間が、今年度より5・6年生で、35時間程度実施することになりました。英語教育に造詣の深い教師も少なく、大きな不安を抱えながらのスタートになりました。

実際に毎週1時間の英語活動が始まってみると、それまでは授業時間数が少なかったために特に気にならなかったことも、大きな問題となってきました。「教科書もなく何を教えていったらいいのか」「指導計画はどうすればいいのか」「どのように指導していくのが効果的なのか」「英語活動を行う意味は何か」「担任は何をすればいいのか」「ALTやボランティアがいないと授業が進まない」など、不安や分からないことばかりでした。英語活動の学習が始まった当初は、子供たちの方も活動の流れに慣れていないため、ALTが活発な学習を仕組んで展開する割には積極的に関わろうする児童は少数で、むしろ気後れし消極的になっているような状態でした。そんな英語活動のスタートでしたが、疑問や分からないこと、不安は、みんなで話し合い、考えを出し合いながら、解決に向けて実践に取り組んできました。

1年目が終わった現在、子供たちの変容を見てみると、英語活動への取り組みは大変意欲的になり、英語の学習を楽しむことができるようになってきました。3学期には下校の際、ALTやボランティアに対して英語で“See you”などとあいさつをしていく場面が多数見られるようになってきました。また、普段の授業においては消極的な児童や学習意欲が持続しない児童が英語活動の時間に大変意欲的に関わっている姿を多くの場面で見ることができるようになりました。さらには、他の授業も活発になるなど良い波及効果も見られています。

一方、教師も、毎週木曜日放課後の話し合いの時に、「ALTやボランティアとの関わり方がおぼろげながら分かってきた」との意見が出され、当初の「どのように関わっていけばよいのか」「教師は、何をしたらよいのか」などの疑問点が解決・改善されてきていると実感できるようになってきました。

本報告書は、これまで進めてきた研究の1年次分をまとめたものです。今後はこれまでの実践・研究で明らかになった課題や問題点を解決・改善に向けてさらに実践を進めて行く予定です。

## Ⅱ

# 本校の英語活動・ 国際理解教育の歩み

### (1) 平成15年度まで

年間1回のALT(Assistant Language Teacher)の訪問にあわせ、各学級年間1回の英語活動を行っていた。内容については、各学年に任せられ、学年主任が、ALTの勤務校である土浦五中へ出向き、授業内容について打ち合わせてきた。内容は、ALTにおまかせであることが多く、学年間で内容の難易度等に逆転現象が起こることもあった。

年間1回の授業であるため、「打合せ時間の確保」「内容の検討・配列」等の課題点もさほど問題とはならず行うことができた。

一方、「国際理解教育」に関しては、3・4年生を対象に、2時間扱いで「国際交流集会」を開いてきた。これは、市生涯学習課から紹介いただいた外国の方と、3・4年生が体育館に一堂に会して交流会を持ったものである。

### (2) 平成16年度

ALT訪問の回数、国際交流集会については15年度までと同じ取り扱いであったが、前年までの反省を生かし、英語活動に関しては、指導案を教務へ一括集約し、学年間の配置ができるよう整備し始めた。

年度末の反省・校内検討委員会において、国際交流集会をやめて、その分の時間を英語活動に充てようという意見が出され、検討した。その結果、回数を年間2回に増やし、英語活動を充実させようという結論になり、17年度へ引き継ぐことになった。

また、校内検討委員会での話し合いの結果、先進校の英語活動指導案を集め、参考にすることにした。

### (3) 平成17年度

この年より、年間2回の英語活動の授業が始まった。市教育委員会の計画によりALTの訪問回数は前年度までと同じ6回であるが同時に2人の配置であった。活動の内容は、校内検討委員会で収集した英語指導案を参考にして進めたが、作成した指導案が大まかすぎたのか活用は今ひとつであり、ALT任せの部分が大きかった。

この年の校内検討委員会では、18年度はさらに英語活動の充実を望む声があり、低学年では年間2時間、中学年では3時間、高学年では4時間実施することになった。それに合わせて、より詳細な指導計画を作成し、対応することにした。

(4) 平成18年度

ALTの小学校への派遣は、17年度と同様に2人、6回であるので、綿密に時間割を組むことで、低学年2時間、中学年3時間、高学年4時間それぞれの時間数を確保するようにした。

実際にすすめてみると、指導案を改善したがそれでもまだ不十分で、HRT(担任)、ALT、ボランティアの立場と役割が共通理解できず、指導がうまくかみ合わないところがあった。

ALTの勤務時間の関係から、打ち合わせの時間が十分とれないことに原因があるとも考え、各学年のより詳細な指導時間数分の指導案を作成した。この指導案を見れば、打ち合わせがなくても誰でも授業展開が分かるほど詳細なものである。(実際には、平成19年度より、5・6年生で年間35時間程度の指導時間に増えたため、5・6年ではそのままでは使うことができないことになった。)

(5) 平成19年度

文科省「小学校における英語活動等国際理解活動等推進事業」の拠点校として、第5・6年において

- ①教師の指導力の向上、
- ②指導方法の工夫改善(指導計画、教材・教具の開発、教員の役割)、
- ③ALTや地域ボランティアなどの効果的な活用、
- ④児童の興味・関心等学習状況の変容の把握、
- ⑤中学校との連携、ICTの効果的な活用等

について、実践・研究を進めてきた。本校では、5・6年生英語の時間に合わせて整合性を図るため、1・2年生では4時間、3・4年生では10時間程度実施してきた。研究を進めていくうちに、それまでには見えなかった様々な課題が見えるようになり、その都度、解決・改善を図ってきた。

# 実践・研究の内容

---

## 1 主題の設定

児童が意欲を持って取り組み，自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる英語活動のあり方  
～ ALT，ボランティアとの協力を通して～

---

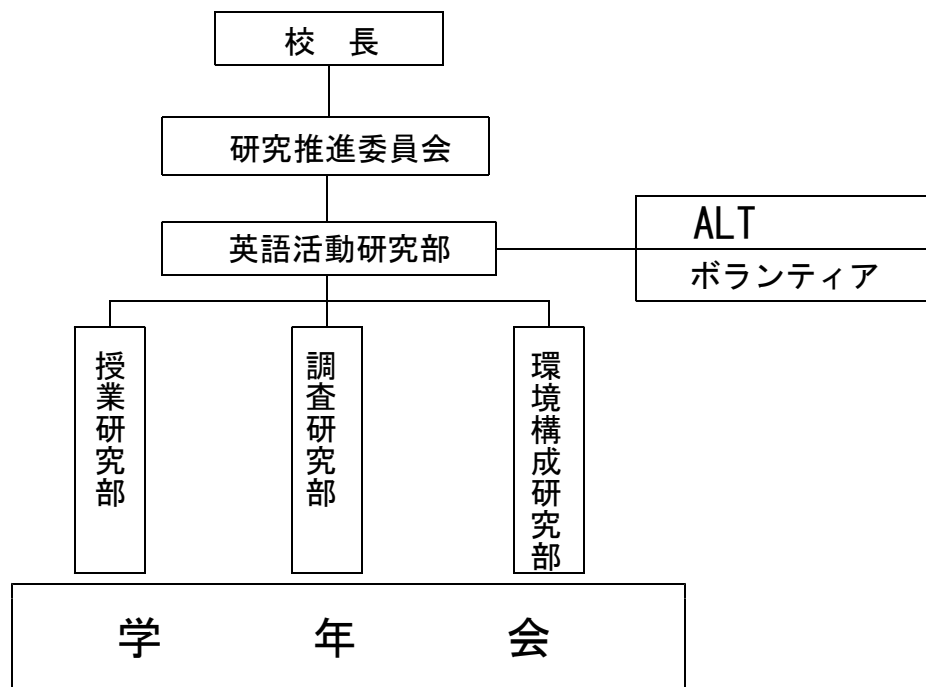
## 2 研究のねらいと取り組みの内容

児童が興味・関心を持って意欲的に取り組み，自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる英語活動のあり方を実践・研究する。

具体的には，以下の点に重点を置き，取り組む。

- (1) 英語活動に関する教師の指導力，資質等の向上を図る。
- (2) 指導方法・指導計画の工夫改善，教材・教具の開発，教員の役割などについて実践・研究する。
- (3) ALT，地域ボランティアの活用，協力のあり方について実践・研究する。
- (4) 児童の英語活動等に関する興味・関心等学習状況の実態・変容を調査し，英語活動に関する資質・能力の向上を目指す。あわせて教師の実態も調査し，指導力の向上を図る。
- (5) 中学校との連携，ICTの効果的な活用等について実践・研究する。

### 3 研究組織



### 4 実践・研究の内容

#### (1) 本校の英語活動における基本的な考え方

##### ①英語に慣れ親しむ態度を育成する

小学校では、まず、英語に対する興味・関心を高め、楽しみながら英語に慣れ親しむことができるようにすることが大切である。英語活動が楽しいと感じれば、子どもたちは、学ぶ意欲も増大し、積極的に学習に取り組むようになっていく。

学習においては、児童の英語に対する負の先入観・負担感を取り除き、楽しく学習していくために、聞く、話すなどの音声を中心とした活動を行うようにしていく。ALT の話す英語から、日本語と似ている音、違う音、大きく異なる音をたっぴりと聞き、英語に慣れるようにしていく。ALT の話す英語を模倣することで英語を話す活動を自然と行うことができるように配慮する。

一方、本校児童の実態を見てみると、「内容が難しい」「分からない」等の理由で英語活動を楽しくないと考えている児童もいる。本校は、週1日 ALT が1名配置されており、第5・6学年においては隔週毎に ALT が入った授業を行うことができる。一方 ALT が入らない週は、担任と日本人のボランティアで学習を進めることにしている。担任と VET で行う週は、繰り返しゆっくりしたペースで行い、意味や内容も理解しながら進めるように配慮している。

##### ②英語嫌いをつくらないために

幼い子どもが言葉を覚える過程では、細かい間違いなど気にせず、どんどん言葉を使って相手に自分の思いを伝え、コミュニケーションしていく。

英語を習得する段階でも、同様のことが言えよう。小学校段階の英語活動で、英語に



対する負の先入観をなくし、どんどん英語を使ってコミュニケーションしていく意欲と態度を培っていくことが大切である。そのためには、ア) 児童の負担感をなくす、イ) 楽しめる体験活動を多く取り入れることが重要であると捉えた。

つまり、ア) 児童の負担感をなくすためには、音声を中心として扱うことが大切である。通常、コミュニケーションは、主に音声と文字を中心に行われることが多いが、本校では、文字は補助的に扱いはするが、覚えることを強要しないこと、簡単な英語を聞いたり話したりすることを中心に進めることにした。

また、イ) 楽しめる活動を取り入れることについては、子どもの実態、思い、願い、好奇心、期待感を考慮し、体験的に体を動かしながら活動できるものを検討するようにした。じっと座ったままの学習ではなく、疑似体験を通して英語に親しんでいくためにあいさつ、歌、ゲームなどを多く取り入れるようにしてきた。

### ③必然性のある活動

子どもたちの学習活動を見てみると、子どもたちは必然性のある課題についてはその取り組む意味を見だし、積極的に取り組んでいる。英語活動においても同様であり、取り扱うトピックは、子どもたちの日常生活に身近なことから扱うよう工夫する必要がある。日常生活に関することや絵や動作に表しやすいもの、具体性があるものなど、活動をしていくうちに子どもが言いたいことがら自然と出てくるように配慮していく。

### ④中学校英語教育との接続性

これまでの本校の卒業生は、中学校に入学した直後から「英語嫌い」になるケースもあると聞いている。中学校第1学年1学期の英語学習の段階で、学習内容の約20%程度しか理解できない生徒もいるということを目にした。

これは、中学校において学習する英語学習のハードルの高さを表すものであろう。本校では、小学校における英語活動と中学校英語教育のギャップを改善し、連続した英語教育ができるよう中学校とも連携を図りながら進めることにした。

小学校段階では、文字の重点的な取り扱いやスキル習得の強要はしないで進めるが、学習を進める上で必要な語彙、基本的な言い方、伝えようとする意志、活動の楽しさなどを学習活動の中で自然と身につくように繰り返し学び、学んだことを生かすような展開を考えていく。

### ⑤ ALT、ボランティアとの関わりと関係の構築

本校では、以前より本校独自のスクールボランティアを整備しており、現在英語活動のボランティアとしては4名の保護者の方が協力してくださっている。指導にあたっては、学級担任(以下 HRT と表す)と ALT、英語ボランティア(以下 VET と表す)の3名で協力して行えるようにしている。それぞれの役割の特徴として考えられることは、以下のようである。

(1)HRT・・・学級の児童の実態を把握しており、児童の個性を生かしながら活動を組織できる。

(2)ALT・・・生きた英語の提供者として、日常のいろいろな場面で、自然な英語の使い方や発音を指導する。異文化の体現者として、外国の様子やさまざまな習慣や考え方を児童に伝える。

(3)VET・・・HRT や ALT の補助的な役割を担い、学習活動がスムーズに進むよう援助する。

VET の数が多くなれば、児童が活動する際に会話や活動の回数を多くできる。

三者がそれぞれの役割を認識し、学習の中で子どもたちにどのように関わり、また、三者が協力してより効果的に指導することができるかが重要になってくる。

## (2) 具体的な取り組み

本校では、前述の通り研究組織を整えた。実際の授業を展開するのは各学年であり、また、指導計画や評価規準などの詳細を検討していくのも各学年である。英語活動研究部は全体を統括する位置づけで、その下部に授業研究部、調査研究部、環境構成研究部の3つの研究部がある。3つの研究部に全職員が別れて所属し、それぞれの分担の内容を実践・研究している。内容によっては、各学年に下ろし、学年で話し合ったり、作業をしたりして進めた。英語活動研究部は各研究部の代表者が所属し、英語活動全体の方向付けを行ってきた。以下に、それぞれの分担での取り組みを詳しく述べる。

### ①各研究部による取り組み

#### [授業研究部]

授業研究部では、授業実施に関すること研究してきた。毎時間授業を続けるために、指導計画や指導案の立案、評価計画などがなければならない。そのために、授業をある程度パターン化して構成することを考えた。

#### (1) 授業を展開するにあたっての基本的なスタンスの決定

##### ア) 授業の組み立て

1時間の授業ですべてを教えようとするのではなく、繰り返しその言語材料を扱えるように年間計画を配慮し、授業を作るように心がけた。そして、45分授業の中に「warm-up」「exercise」「activity」「振り返り」という活動の過程を組み立てた。「warm-up」は、児童を無理なく英語の環境に引き入れるための時間で、緊張をほぐし、自然と英語が出てくるようにするための時間である。

「exercise」では、本時に取り上げる指導内容をゲーム的な方法で取り入れ、「activity」でそれを応用発展させて表現活動をする。ここでは、児童が楽しみながら自然に英語で話せるように、「遊びの要素」を取り入れた体験活動の時間とする。本題材で扱う言語材料を「Target words」「Target sentences」としてこの段階に位置づける。

「振り返り」は授業のまとめである。本時で導入した最初の表現を復習し、確認する時間である。気分を変え、次時につなげたい。

##### イ) 授業を展開するために

児童が英語に興味を持ち、英語を聞き、英語で何かを表現できるという満足感を持たせるために、そして英語が楽しいと感じるために、ア) 逐一日本語に訳さない、イ) 無理に覚えさせない、ウ) 英語の発音をカタカナに置き換えない、エ) 誤りは細かく訂正しない、オ) いろいろな学習形態を工夫する、を心がけるようにした。

また、授業においては HRT と ALT、VET の関わりが重要になってくる。ALT は、ネイティブスピーカーとして、英語の発音やモデルを示し、できるだけ多くの児童に話しかけ、たっぷりと英語を児童に聞かせるようにする。活動の中で自然に児童を励ましたり褒めたりしながら興味・関心を高めていく。一方、HRT は、一人の学習者として、児童にモデルを示すため、児童と一緒に活動に参加する。HRT が英語活動の時間が楽しいと感じることが児童の英語活動への興味・関心を高めることにつながると考える。VET はその補助にあたる。

#### (2) 指導計画・評価規準の作成 (第V章 資料編 指導計画、評価規準参照)

本校としての英語活動を進めるため、ねらいを明確化し見通しを持つ必要がある。共通理

解の基に指導に当たることができるよう、授業研究部で年間指導計画の作成に取り組んだ。ポイントは以下の通りである。

① 本校の英語活動のねらいを踏まえて

国際理解の一環としての活動であり、外国語を覚えることではなく慣れ親しむことが目的であること。そのために、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が重要であること。

② 活動の題材や場面の設定にあたって

児童の実態とねらいを踏まえ、各学年では ア) 児童にとって身近で親しみやすいもの、イ) 各学年の発達段階に応じたもの、ウ) 国際理解・異文化理解に関連するもの、エ) 季節や行事に関連するもの、オ) 他教科と関連するもの、などを盛り込むこと。

③ 学年ごとの活動内容の系統性について

低学年は学期に1時間程度、中学年は年間10時間、高学年は年間35時間程度と活動時間数が異なる。従って高学年を中心として各月ごとにトピックとなる活動案を考え、低・中学年もこれに応じて作成した。時期に合った活動を各学年で行い、各学年で毎年繰り返して次第に身に付けられるようにした。

④ 言語材料の選定

活動ごとの言語材料は、各月のトピックを基に児童同士のコミュニケーションを図れるものを Target words, Target sentences として選定していった。

## [ 調査研究部 ]

調査研究部では、児童・教師の実態の調査を行った。特に英語活動実施前（当初）の様子と変容を比較していこうと考えた。①本活動が始まる前の段階、②1年次終了時の段階、③2年次終了の段階（20年度夏頃）の3段階において、それぞれアンケートを実施し、実態・変容を捉えようとした。（第V章 資料編 アンケート調査の項参照）

### (1) 実態調査の実施

第1回目の調査は、これまでの英語活動を踏まえて、児童や教師の英語活動に対する意識や興味・関心などについてアンケート調査を19年度7月末に実施した。アンケート項目については、調査研究部で「英語活動のねらい『小学校英語活動実践の手引き』」や神立小学校の研究主題を基に洗い出し、精選した。

### (2) 児童の実態、結果と分析

#### (ア) 児童の実態について

外国人児童が多く在籍しているので、外国人と触れ合ったり、話したりする機会は多い。英語のビデオや絵本などで英語に触れる機会も少なくない。将来外国に行ってみたいという児童も59%いて外国に対する憧れも感じられる。

#### (イ) 英語に対する興味について

高学年になると、間違いたくない、恥ずかしいという思いが出てきて、英語で話しかけることに消極的になっている。反面、英語で話したいという思いは、高学年になるほど強いことが分かった。英語で話すことのよさをたずねると、外国に行って話せる。役立つ。困らないという実用面でのよさを感じている。外国人の友達ができるという児童もあり、積極的にコミュニケーションをとりたいという意識があることが感じられる。

#### (ウ) 英語の授業について

大部分の児童が授業は楽しいと答えている。楽しかった英語活動は歌や動作を伴う活動やゲームが多かった。これから行いたい活動では外国人を含めた実際の会話活動をあげている。高学年になればなるほど、より高いレベルでの英会話活動を取り入れた授業

を求めていることが分かった。また、多くの児童が英語の授業をもっと多くしてほしいと思っているが、その理由からは自分の英語力を向上させたいという前向きな向上心が読みとれた。しかし、40%の児童は英語活動について何らかの困ることを訴えていた。

#### (エ) 英語活動の現状

多くの児童が、歌やゲームなど体を動かす活動を取り入れた英語活動に積極的に取り組み、かつ楽しいと感じている。これらの児童は、英語の授業がもっと多い方がよいと答えている。しかし、これらの児童でも英語の授業で習った言い方を使って周りの人とやりとりをすることは少なく、受け身的な態度が見られた。さらに、英語を覚えようという意識は低いのが現状である。

#### (オ) 英語の技能について

日常生活や前年度までの英語活動などの経験から「あいさつ」「自己紹介」「10までの数」「色」「体の部分」をどのくらい児童が英語で言うことができるか調査した。これまでの英語活動の経験回数の少ない2学年はどの項目においても「できない」と答えた児童が他の学年に比べて多かった。中学年は、「できる」と自己評価しているものが多く、英語活動への前向きさが感じられた。5年生は英語活動への抵抗が強く、興味が持てない、自信がない等の実態が見られた。

### (3) 教師の実態、結果と分析

これまでの英語の授業はほとんど ALT 中心の活動であった。やりやすい点は、子ども達が楽しく活動でき、教師は児童の援助を主にすることができたところであった。やりにくい点はボランティア、HRT、ALT の役割分担が不明確だったことや打ち合わせ時間を十分に取ることができなかったことであった。英語の免許を持っていない教師が多く、自信をもって英語の授業は行えないという意見が多かった。特に会話で思ったことを自由に話せない、的確な指示ができない点など不安に思っている。そのため、これまでの英語活動が充実していたと感じているのは約半数である。しかし、65%は小学校での英語活動を必要と感じている。国際教育重視の立場から英語への関心を高めて中学校へ送る必要性があるからである。コミュニケーションできた喜びや楽しさを味わわせるための活動の提案や現在の悩みも多く出された。これらの意見を踏まえて、実践に結びつけていくことが大切である。

## [環境構成研究部]

環境構成研究部では、児童の英語への興味・関心を喚起し、より一層高めるために、授業における工夫の他に、教室環境やその他の活動にも配慮するようにした。児童が意外性に驚いたり、親しみあるものに感嘆したりするような、児童の心を引きつける楽しい教材や環境を整備することで、英語活動そのものが生き生きとしたり、楽しさがぐっと増したり、印象に残ったりし、児童が英語に親しみやすくなると捉えたからである。以下に、室内の環境整備、E-world 活動について述べる。

#### (1) 英語環境の整備について

児童が興味を持ち、ALT や友だちなどとコミュニケーションをとるきっかけになることを願って、階段のステップ部分に、親しみやすいイラストとともに英語を掲示した。また、階段踊り場にある掲示場にも英語スペースを作り、季節に関する掲示物を貼り、視覚に訴えかけるようにした。児童は、意味や発音が分からなくても掲示物を指しながら友だちと会話したり、発音の仕方を教師に尋ねてきたり、発音できる児童は声に出しながら階段を上ったりするなど、自然に英語に触れ、親しむようになってきた。

#### (2) E-world 活動について

ALTと遊んだり、英語に触れたりすることができるE-worldを開設した。これはALTとE-roomで一緒に遊んだり会話を楽しんだりするものである。さらに、ボランティアの方々によっても同様の活動を週に1回休み時間に行うようにした。

活動を行うE-roomの部屋の中には、ALTの紹介コーナー・英語の本・ゲームなどのほか、児童の日常生活を表した掲示物を貼った。さらに、廊下壁面も活用し、各月のイベントや活動の歩みなどを掲示できるようにした。イラストや実物などを多く取り入れ、児童が英語に親しめるような工夫をしながら部屋の掲示を工夫している。

また、教材を準備する際には、①活動を活気づかせる②児童の英語への興味を起こさせる③印象づけるなどを意識し、できるだけ手作りのものを用いるようにしてきた。児童が日常的に英語に触れることができ、英語を体感・イメージ化し、感性が揺さぶられるような英語環境の整備に努めている。

## ②各学年による取り組み

### (ア) 授業実施のための準備・打ち合わせ

各学年・学級では、毎週の英語活動を実施するために、①授業計画の立案 ②ALT・VETとの打ち合わせ・準備 ③授業実践 ④反省 ができるようなシステムを構築しなければならない。本校は5・6学年は3クラス編成であるので、当初は午前中2・3・4校時に英語活動の時間を設定した。ALTは午前8時10分から勤務し、午後3時に退勤する勤務体系であったため、担任との打ち合わせは、朝の自習時間しかとれず、その時間に担任外の教師が各クラスを見、その間に担任が打ち合わせをするようにしていた。しかし、これでは打ち合わせの時間を十分とることができず、準備が整わない状態であった。担任とALT、ボランティアの話し合い、綿密な打ち合わせが授業を進めていく上で一番大事であるから、市教育委員会に相談し、ALTの勤務時間を2時間後ろにずらすことにした。つまり、ALTの勤務時間を午前10時より午後5時までにしたのである。このことにより、ALTが放課後も学校にいることになるので、約1時間の打ち合わせ時間を確保することができるようになった。この時間は、反省や次週の準備・打ち合わせの時間であるので、最優先して確保するように努めた。

### (イ) 授業の実践例

第5・6学年では、授業は毎週1時間行ったが、ALTが一人であるので、本校では、第5学年、6学年それぞれ隔週ごとにALTが入る授業を展開することにした。ALTが入って行う授業は、基本的には英語のみで進められていくが、ALTが入らない週は、担任とボランティアで行い、特に初年度については、前週（ALTが入った週）の授業を繰り返して行う（復習）ようにした。このやり方は、第2週目にはゆっくりと自分たちのペースで授業を進めることができ、児童も担任も内容を理解しながら進むことができた。以下には、第5・6学年で行った授業の実践例を挙げる。（第V章 資料編 指導案参照）

#### [第5学年]

1) 題材 「演奏会をしよう」 Let's have a concert!

#### 2) 授業展開のコンセプト

題材を考えるに当たって心がけたことは、必然性を生み、英語を話したい・英語を使って活動したいという欲求のもとに授業が展開できるということである。

本題材は、身の回りにあるものを使ってリズムをとり、グループごとに演奏会を行うというものである。演奏会を行っていく中で、児童は英語での賞賛の言葉を知り、それを発していく。

簡単な言葉であるので、発言しやすいばかりでなく、英語を使えた満足感も味わえる。また、褒められた児童はより意欲的に活動するはずである。そして、お互いに英語でのコミュニケーションもとれる。

### 3) 授業の実際

「warm-up」では、ALT といつも通り、英語で挨拶を行ったあと、天気、曜日・日時など身近な題材で応答をした。HRT は ALT と最初にデモンストレーションをし、その後で児童一人一人が縦の列ごとに速さを競いながら答えていった。遊びの要素も加わっているので楽しく取り組むことができた。その後、Simon says ゲームを行った。テンポが速く、体も使いながらの活動で、児童は実に楽しそうであった。

「exercise」では、演奏会で自分が使う材料の言い方の練習をした。カードを使いクイズ的にすすめた。児童はそこで「It's a ~」の言い方に慣れていった。また、「Use a ~」の言い方をグループの中でコミュニケーションをとりながら練習をした。このとき ALT や VET, HRT は児童に寄り添い支援をしていった。「Let's make a music!」「Yes let's」というお互いのコミュニケーションの取り方も練習した。ここでも ALT と HRT がお互いに応答し合って児童に示した。

「activity」では、グループごとの演奏会を行った。演奏だけをして終わるのではなく、始める前には「Let's make a music!」「Yes let's」と言葉をかけ合い、演奏が終わると一方は「Great!」「Wonderful!」「Nice!」「Good!」などの賞賛の言葉をかけ、他方は「Thank you!」と答えるようにした。日頃の授業の中ではあまり目立たない児童が積極的に言葉をかけていた。演奏中は笑顔で、体を動かしながらリズムをとり、活動を楽しんでる様子がうかがえた。HRT は演奏会がスムーズに行えるように、児童がリラックスして行えるように支援した。また、活動意欲を高めるために演奏会にふさわしい環境作りに努めた。ALT は演奏を終えた児童にジェスチャーを交え賞賛の言葉をかけた。

「振り返り」では、「ファイナルコンサートを楽しみましょう」と HRT が呼びかけ、世界の民族音楽に親しむ時間とした。児童の意欲・関心を高めるために、音楽を流した後でどこの国の音楽かを当てるというクイズにした。児童は、とても意欲的に取り組んだ。そして、最後に ALT が今日の「Target sentences」をもう一度児童と共に確認した。

### 4) 考察

○身の回りの材料を使って演奏することはそれだけでも十分楽しい活動である。そこに英語を使ったコミュニケーションが入ることで、児童は抵抗なく取り組むことができた。

○ ALT とのふれ合いを児童は瞳を輝かせ、喜んでいる。英語活動の時間を待ち遠しく感じている児童も多い。ALT を通して外国の文化に触れる喜びは大きいと思われる。また、同時に児童の知的好奇心を十分に満たすことができた。

○初めの頃は英語活動にとまどいを見せていた児童も、活動の回数が増えていくたびに英語に慣れ、自然と身に付いてきている。体育の授業で、技を決めた友だちに自然と「Excellent!」「Wonderful!」「Great!」という言葉が発することができるようになっていた。

## [ 第 6 学 年 ]

1) 題材 「音当てゲームをしよう」 What sound is this ?

### 2) 授業展開のコンセプト

本時では、児童の発想を生かせるように、材料を選ぶ時点から多様な材料に触れさせた。ねらいを達成させるために、音当てゲームを取り入れながら児童の意欲を引き出すこと、児童が互いに問題を出したり答えたりするというコミュニケーションを取ることで、助け合いながら英語に親しんでいくことを重視した。また必然性を持たせるために、ゲーム性のある活

動を多く取り入れ、得点表も用いた。演奏会に向けて「こんな材料を使いたい」と主体的に取り組めるよう支援していく。

### 3) 授業の実際

「warm-up」では、始めの挨拶を行った。普段自ら挨拶をしない児童も、列ごとの挨拶ゲームであるため、素早く言葉を発していた。英語が思い浮かばない児童は、友だちやHRT、VETなどの支援を得て話すことができた。続いて行ったSimon says ゲームでも、児童はALTの指示を注意深く聞いて素早く反応することができた。速いテンポの中で活発に活動し、雰囲気盛り上がった。

「exercise」では、本時のTarget wordsを楽器となる材料の絵カードを用いて練習した。ALTとHRTで始めにデモンストレーションを行い活動に見通しを持たせた。「It's a ~.」の言い方とリズムを共に身に付けていった。ALTはテンポや声のトーンなどに変化をつけ飽きさせない工夫をしていった。グループ対抗のクラッシュジャンケンゲームは、絵カードの名前を1つつづき言い当てながら進み、ぶつかった相手とじゃんけんをするものである。言わないと進めず、また勝負がかかっているため、どの児童も熱中して行っていた。ALT、HRT、VETはそれぞれの列につき、スムーズにゲームが進むよう支援した。

「activity」では、音当てゲームを2種類行った。まずはALTが、はてなBOXの後ろでペットボトルや缶をたたいたりこすったりしながら音を出し、音からその材料を当てるものである。見えない分児童は意欲的になり、活発に手を挙げて答えた。材料の名前を先に答えようとしたため「It's a ~.」の形は不十分であったが、真剣に耳を傾ける姿が見られた。次はグループごとにCDラジカセを用いて本物の楽器の音を当てるというゲームである。ラジカセを操作する児童を中心に、「What sound is this?」と皆で発音してから音を聞き、「It's a ~.」で答えるようにした。発音は明確でない部分もあったが、児童はそれぞれグループで相談し合い、何の楽器かワークシートに記入していった。最後に全体で答えを確認し、当たった、外れたと各班盛り上がった。

「振り返り」では、ギロやマラカスなど各国の民族楽器を幾つか紹介した。児童も触れながら次時のコンサートに向けての意欲が持てるようにした。自己評価カードには、「音当てが楽しかった」「以前より友だちと話せるようになった」「ALTと話せてうれしかった」「積極的に活動できた」「英語がわかるようになった」との前向きな感想が多く見られた。

### 4) 考察

- 人前で自己表現することが苦手な6学年の児童にとって、英語活動は一人一人が積極的に活動できる大切な場である。始めの頃は「英語ばかりで何を言っているのかわからない」「基礎から学ばないとわからない」「進んで話すことができない」と活動に消極的だった児童の多くが、回数を重ねるごとに前に述べたような前向きな感想を持つように変化していったのである。この理由としては、ALTの持つ独特な雰囲気や盛り上がり、テンポのよい進め方、話さなくては次に進めないというゲーム的な展開が考えられる。
- exerciseで行ったクラッシュジャンケンゲームなどは、どの児童も楽しんでしかも必ず英語を話すことのできるゲームであり、ねらいに迫るには大変有効であった。
- 児童の実態を受け、雰囲気を盛り上げるためwarm-upから数多くのゲームを取り入れた活動であった。次々に変わる活動に乗りやすい反面、内容が盛りだくさんで振り返りの時間まで余裕を持ってないという面もあった。

## ③英語活動研究部による取り組み

### (1)指導力向上のための研修会の実施

夏休みを利用して、指導案作成等についての研修を行った。指導案作成では、教師が中心となり指導内容を考え、それに ALT が具体的なゲームなどの要素を取り入れた活動を示すようにした。また、その過程において、指導案を計画する上でのポイント等も得ることができた。

また、ALT が先生役に、本校の教師が児童役になった模擬授業も行った。これによりどのような活動が盛り上がり、児童が集中するのかなど授業展開のポイントを身につけることができた。これらの研修には、VET も一緒に参加できるようにした。

日 時	内 容 等	担 当
7月23日(月) 9:00～12:00	<b>【研修(英語)】</b> ○英語各研究部ごとに研修 ・授業研究部(年間計画・評価) ALT, ボランティア参加 ・調査研究部(調査・分析) ・環境研究部(英語活動・環境検討)	○英語活動主任
7月25日(水) 13:00～16:00	<b>【研修(英語)】</b> ○ALTによる模擬授業 ○ALT, ボランティアとの共同指導案づくり (各学年ごとに、できるだけ夏休み中に3学期分まで作成するようにする) ・分担 ・AET, ボランティアとの共同作成について、計画など	○英語授業研究部
7月31日(火) 13:00～16:00	<b>【研修(英語)】</b> ○学年ごとの研修 ・指導案作成(学年毎に分かれて)	○英語活動主任, 各学年主任
8月3日(金) 14:30～16:30	<b>【研修(英語)】</b> ○各研究部ごとの研修 ・前回の続きを進める (必要があれば、ALT, ボランティアの協力を要請する)	○各研究部主任
8月21日(火) 10:30～12:00 (職員会議後)	<b>【研修(英語)】</b> ○学年ごとの研修 ・指導案取りまとめ(3学期分まで)	○各学年主任

## (2)講師を迎えての講演会の実施

11月27日(火)に、中部学院大学教授の久埜百合先生を迎え、小学校英語活動の方向性や指導の際のポイント、具体的な指導法などについて講演会を実施した。本講演会は、「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の一環として実施したもので、土浦市内の小学校はもとより、かすみがうら市、石岡市内の各小学校にも案内を出し、全体で約60名ほどの参加があった。



# IV 研究の成果と 今後の課題

## 1 研究の成果

### (1) 児童が英語に親しみ、積極的にコミュニケーション活動を進めたかの視点で

英語活動の学習が始まった当初は、積極的になれない児童が少なくなかった。これは、気恥ずかしさや英語を理解できないことなどによるものであると思われる。しかし、現在は児童の様子から英語活動への取り組みの楽しさが伝わってくる。また、特に五年生においては、当初は苦手意識を持っている児童が多かったが、現在は、英語でコミュニケーションをとる楽しさが伝わってくる学習活動となっている。

ALTの控室を訪れた児童が自然に「Thank you」「See you」と言葉をかけていく場面も見られるようになり、児童の英語スキルが日常でも生かされるようになってきた。

また、国語や算数などの授業ではあまり意欲的になれない児童が、英語活動の学習においては、自ら挙手し意欲的に活動していく場面は枚挙に暇がない。

学習が進むにつれ、児童は自然のうちに英語スキルを身につけ、簡単な会話をすることができるようになってきており、確実に自信を持って学習に取り組めるようになってきている。

### (2) 担任、ALT、VETが役割を分担し、効果的な指導が展開できたかの視点で

二学期の英語活動反省会において、担任から「ALT、VETと協力して授業を進めていくうちにおぼろげながらそれぞれの立場と役割を理解し、協力して進めることができるようになってきた。」との感想が出された。

当初はALT、VETとHRTの三者の関係と協力のしかたについてどのようにしたらよいか分からない状態であったが、打ち合わせの時間を確保し、お互いに考えを十分に出しあい共通理解を図ることにより、お互いの立場や役割を理解し、効果的な指導を行えるようになってきた。私たち教師だけでなく、VETも英語活動を行っていくうちに自分の役割、授業への関わり方等が分かり、活動がスムーズに流れるようになってきた。

### (3) その他の成果

6学年の学習において、特別支援学級のA児が生き生きとVETとコミュニケーションしている場面が見られた。通常、A児は関わりの少ない教師が話しかけてもコミュニケーション

ンをとることは難しいが、その場面を見る限り、A 児自身のコミュニケーション力が向上したことは間違いない。英語という日本語にはない独特の雰囲気の中で、VET とじっくり時間をかけ、一対一でコミュニケーションをとることにより、その児童の持つコミュニケーション力が引き出されたと考えられる。

また、5 学年の学習においては、普段は課題把握が困難で活動や友だちとの関わりにおいて消極的な B 児も、隣の友だちとの関わりによって助けられ活動を楽しむことができた。さらに、普段の学習では意欲的になれない C 児も英語活動の時間だけは笑顔をほころばし、にこにこ ALT に関わることができた。ALT が投げかけた質問についても英語で返すことができている。C 児は、このことが自信となって、他の教科にもよい影響が出てきている。

---

## 2 今後の課題

研究を進めていくうちに、取り組んでみなければ分からないような悩みや問題点が見えてくるようになった。その都度、話し合い、改善するよう努めてきたが、以下の点は、今後さらに力を入れていかなければならない点である。

- (1) 指導する側の HRT, ALT, VET においても効果的に連携していくためには、コミュニケーションが重要である。今年度は、ALT の勤務開始時刻を 2 時間遅らせることで放課後に打ち合わせの時間を確保した。今後、そのための時間を確保することが重要である。
- (2) 本校では、英語活動が生き生きとし、児童が英語に親しみやすくなるための方策の一つとして、E-world 活動を展開した。今後は、ボランティアを確保すること、今後の活動内容をさらに充実させることが課題である。
- (3) その他、英語活動に取り組み、
  - ・ ALT やボランティアがいなくても学級担任が自信を持ってリードしていける英語活動の構築
  - ・ ALT を活用した研修の充実
  - ・ 中学校との連携と ICT の活用
  - ・ 守秘義務の遵守と個人情報の保護なども解決していかなければならない点である。

# 資料

## V 編

# 1 年間指導計画・評価規準と 指導案

※ 年間指導計画，指導案等については，夏休み，冬休みなどの長期休業を利用して作成しました。授業を実施しながら変更したり，改善したりしたために当初の計画と変更になった部分があります。

## 2 アンケート結果と分析

※ アンケート問題については、紙面の関係で割愛しました。また、集計の都合上、グラフ等の表示の仕方、順番の入れ替えがあります。